氏　　名	村田　亜紀子
授与した学位	博　　士
専攻分野の名称	医　　学
学位授与番号	博　甲第　6895　号
学位授与の日付	2023 年 9 月 25 日
学位授与の要件	医歯薬学総合研究科 社会環境生命科学専攻 （学位規則第 4 条第 1 項該当）
学位論文題目	Childcare and child development in Japan （日本における保育とこどもの発達について）
論文審査委員	教授 神田秀幸　　教授 髙木　学　　准教授 岡田あゆみ

学位論文内容の要旨

【背景】 世界的に働く女性が増える中、育児や就学前教育の実践が子どもの発達に与える影響は常に注目されているが、十分な研究が行われていない。
【目的】 日本で実施された「21 世紀新生児縦断調査」のコホートを用いて、3 歳未満の子どもの保育施設利用が子どもの発達に及ぼす影響を検討した。
【方法】 調査対象者 47,015 人のうち、高学歴の母親を持つ者 5,508 人を対象に、平日日中の主な保育者と 2 歳半、5 歳半、8 歳の発達指標との関係を検討した。
【結果】 2 歳半、5 歳半の行動指標では、2 語文の構成（調整オッズ比［aOR］: 0.22）と感情表現（aOR : 0.81）で、保育施設群の方が母親群より優れていた。しかし、8 歳の行動指標では、遊びの順番を待てない、嘘をつくなどの項目で両群に差がみられなかった。
【結論】 保育施設群では母親群と比べて児の発育発達に大きな差がみられなかった。

論文審査結果の要旨

社会の女性進出に伴って、子どもの保育施設利用が増えているが、その利用による子どもの発達に与える影響についての詳細な検討はほとんど見当たらない。申請者らは、平日日中の主な保育者として保育施設利用群は母親の育児群と比較して児の発達に与える影響に差が無いという仮説を設定した。本研究では、保育施設利用者群と母親の育児群において、2歳半、5歳半、8歳の発達状態を比較検討することを目的とした。厚労省21世紀新生児縦断調査のコホートを用いて、高学歴の母親を持つ者5508人を対象に、児が2歳半、5歳半、8歳の言語発達・運動発達・問題行動など児の発達状態の評価を用いた。結果として、2歳半かつ5歳半では保育施設利用群が母親の育児群より言語発達や運動発達に良い影響がみられた。一方、8歳の発達では母親の育児群の方が保育施設利用群より行動発達に良い影響がみられた。これらから、児の発達に保育施設利用は母親による育児と大差ないことが示された。

委員からは、研究の前提となっている「3歳児神話」の定義および評価年齢の区切り、高学歴の母親をもつ者を対象とした理由、兄弟姉妹の数・出生順の影響、1歳半時点での保育施設利用との関連について質問がなされた。対象者は、対象未満年齢では運動発達が中心になっており、今回の評価では言語発達・行動発達の影響を評価することとした点から年齢を区切ったこと、高学歴の母親に限定した理由はデータの欠損が少なく高卒など他群と検討し大差がなかった点、兄弟など影響が発達に及ぼしている可能性は否定できない旨の回答がなされた。発表は的確で，周辺知識の学習も十分に認められた。

よって，本研究者は博士（医学）の学位を得る資格があると認める